

生き生きと、美しく

愛知淑徳学園理事長・学園長

小林素文

先日いただいたセピア色の写真には、創立者小林清作先生の五女の愛子(左)、四女の知子(右上)、三女の淑子(右下)、次女の徳子(中央)、合わせて愛知淑徳4姉妹が居並んでいます。

徳子は主将として淑徳庭球部初の優勝旗を受け取る栄誉を得ました。

淑子は愛知県立高等女学校へ進学しましたが、娘の御田寺敦子が淑徳テニス部で全国制覇を成し遂げました。

知子は淑徳庭球部に入学したものの上達せず悩んでいた時、校長であり父である清作先生に「人が百本打つなら千本打ちなさい」と諭され、それを忠実に実行し、全国大会で優勝を重ねていきました。

愛子は淑徳では怪我が多く活躍できませんでした。卒業後入ったテニスクラブで腕を磨き、姉の知子と組んだダブルスで全日本チャンピオンになりました。



創立者の娘たちが活躍していた昭和初期は淑徳スポーツ黄金時代。テニス、水泳、陸上、バレーボールなどで全国優勝を勝ち取っていました。極め付きは昭和九年にロンドンで

開かれた『世界女子オリンピック』での陸上八百メートル。当時、「女子には中長距離競技は過酷すぎる」とオリンピック種目からはずされていたため、この大会が女子中長距離選手のオリンピックでした。その大舞台で、淑徳生の井戸田きよ子が日本記録で六位入賞の快挙を果たしたのです。

スポーツ黄金時代は一朝一夕に築かれたものではありません。

愛知淑徳が創立された明治三十八年の高等女学校への進学率は5%程度。良家の子女に限られた女学生は深窓の佳人が望まれていました。しかし、清作先生は「深窓の佳人だの、箱入り娘だのと云って、成るべく女子を外に出さぬふうがある…(中略)…これからの女子はお姫様然としていてはいかぬ。身体を強健にし、動作を活発にし、生き生きしてあらねばならぬ(明治三十八年)」と体育を奨励しました。

なつていきますが、それでも反対する父兄の声に清作先生は「美人観の革命」と題する一文を書かれました。「淑徳でも、競技をする手が太くなって困るとか、怪我をする困るとか、中々少なからず苦情があるのである…(中略)…深窓の佳人式のものももう美人ではない。これからの美人は顔に壮健の色が漲り、均齊に発達したる肢体を有するものでなければならぬ。運動で鍛え上げたる生き生きとした美人が持たされてこそ、我が日本に興国の気象ありと云うべけれ」(大正二二年)。

女性には固定観念があり制約が多かった時代に、淑徳生は生き生きと美しくあれと願う清作先生はスポーツを奨励したのです。

*
深窓の佳人は古語となり、すっかり時代は変わりましたが、生き生きとしている人が美しい人であることに変わりはありません。

男女を問わず、老いも若きも、生き生きと美しくあるために何をしたらよいか。それが問われる今の時代です。